

水も電気もないミャンマーの奥地で現地の人たちの治療に当たる名知仁子さん



ミャンマーの奥地で医療支援を続ける名知仁子さん

ミャンマーと日本の懸け橋になりたい

11月8日に行われたミャンマーの総選挙で、アウン・サン・スー・チーさんの率いるNLD（国民民主連盟）は圧勝し、過半数を超える議席を獲得した。すでに2011年に民政移管になつているが、この選挙で単独政権樹立が可能になり、ミャンマーの民主化が急速に進むものと予測されている。「最後のフロンティア」として日本の企業の投資も加速している。

しかし、このような経済進出とはまったく関係ないところで、2004年からこつこつとミャンマーの奥地で医療援助をしてきた医師がいる。特定非営利活動法人「ミャンマー・ファミリー・クリニックと菜園の会（MFCG）」の名知仁子さん（52）である。

「私たちが拠点としているのはミャンマーの南西部、エーヤワディ地方のミヤウンミヤという町ですが、近くに診療所もな



東京・芝の増上寺で開催されたミャンマー祭り。支援者に囲まれる名知さん。

く医療従事者もいないため、村の住民は3時間かけて治療を受けにきたりします。交通手段のない患者さんがこまごまと来るのは大変なので、私たちのほうから村々へ出掛ける巡回診療をしています。主に巡回診療用の車を使い、雨季には船も使つて各地の村に入り、寺院や村長の家を借りて、診察したり、住民の健康相談に乗っています。診察といっても血液検査も、レントゲンなどの検査もできないので聴診器一本で診るです。私は循環器系の専門医ですが、そんなことは言っていられません。呼吸器も消化器も小児科も皮膚科もすべて引き受けなければなりません。さすがに産婦人科は怖くてできませんが」

年間4分の3はミャンマーに滞在

名知さんの診察は単に病気を治すだけではない、病気の伝染を防ぐためのトイレの改善、ボウフラがわかないための対策、栄養不良から来る病気の予防のための家庭菜園の作り方まで幅広い。

1963年生まれの名知さんは1988年に独協医科大学を卒業して日本医科大学第一内科医局に入局した。このころの名知さんの生活は夜中の3時まで勤務し、3時間の睡眠で6時には出勤するというハードなものだった。

「朝早く出て、夕開進のころにミヤウンミヤに戻ってくるのですが、本当にたくたになつてたり着くという感じです。戻つたところで温かいシャワーが待っているわけはありません、何しろ電気も水もないのです。

「今考えると大変な勤務でしたが、多くの患者さんを診ることが私いろいろな経験を積むことができたので本当に感謝しています」が、振り返る。仕事は厳しかったが、やりがいがあった。いつかは一国一城の主となるべく独立して開業することをひそかに期していた。そんな名知さんに大きな転機が訪れたのは1994年に何げなく手に取つ

たマザー・テレサの本だった。その本の中に「もし、あなたの愛を誰かに与えたらそれはあなたを豊かにする」という言葉があった。この一行が名知さんの人生を変えた。医師でも看護師でもないマザー・テレサがこのような言葉を発することができたのはなぜだろうと考えた。

「おそらく日々多くの命と向き合い、そのすべての命を受け入れたから言えた言葉だろうと思いました」

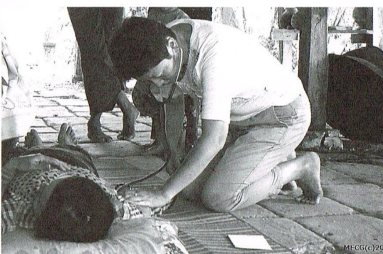
他の医師ならば見過ごしてしまふであろう言葉に、名知さんの精神は激しく反応した。この時、名知さんは自分の役割を発見したのである。大病院に勤務してから何となく既定の路線を走り続けてきた名知さんが、医師としての真の自覚、自分の進むべき方向を確信した瞬間だった。

「私は日本医科大学を退職して1999年にノール平和賞を受賞した国際緊急支援団体に登録しました。外科の開業医としていた父親は猛烈に反対していました。何もそんなところに行く必要はない、大病院で働いた11年間は無駄になると思つたのでしょね。確かに国際医療に携わつたとしても、その時代の日本ではキャリアアップに役立つ

ことはほとんどないと考えられていました。実際は、人間とどう向き合うかなど学ぶことは多いのに」

この国際緊急支援団体は、中立・独立・公平な立場で医療・人道援助活動を行う民間・非営利の国際団体で、1971年にフランスで設立され、1992年には日本事務局が発足した。団体の活動は、緊急性の高い医療ニーズに応えることを目的として、紛争や自然災害の被害者や貧困などさまざまな理由で保健医療サービスを受けられない人々が対象となつている。純粋な民間団体で、運営は一般からの寄付で成り立っている。

名知さんが派遣されたのはミャンマーとの国境にあるタイ側の難民キャンプだった。ここでは迫害から逃れてきたカレン族が多く収容されていた。貧困だけでなく、少数民族の問題や宗教などさまざまな要因が複雑に絡まり合つていることを知つた。「この時の活動は内科医として短ければ6カ月、長くは2年、現地に滞在して診療に当たるといふものですね。そしていつたんだ日本に戻つて、再度連絡が来た時に次の赴任地に向かいます。私は日本に戻つた時はもっぱらアルバイトでお金をためて再度、



最新の医療機器がない環境で、ほとんど聴診器一つで患者を診る。



住民に衛生に関する知識を持ってもらうための講義も、重要な医療支援

活動に参加していました。私が参加したころの報酬は決して高いとはいえず、東京のアパート代を支払うのも大変でした」

その後、彼女は外務省関係からヨルダンに派遣された。ここではイラク戦争で難民となったクルド人の治療に当たつた。初めてミャンマー国内での医療支援活動は2004年、ロヒンジャー人への医療援助で、その次に2008年のデルタ地域でのサイクロン被害者に対する緊急医療援助を行った。

たびたびミャンマーを訪れていと愛着がわいてくる。団体からの指示で動くのではなく、ミャンマーにじっくり腰を落して着けて現地の人々の力になつたと思うようになった。そこで2008年現在のNPO法人の前身である任意団体「ミャンマー・ファミリー・クリニックと菜園の会」を設立し、さらに2012年に特定非営利活動法人「ミャンマー・ファミリー・クリニックと菜園の会」を立ち上げた。

NPOを設立したものの、会の存続は容易ではない。医薬品の購入のほかに、現地で手伝ってくれる医療スタッフの人件費も稼がなければいけない。今、名知さんは年間の4分の3はミャンマーに、4分の1は日本に

滞在するが、日本に帰つてきた時はもっぱら寄付を集め、講演をし、活動をPRして資金を稼いでいる。なぜ、名知さんは約束されていた安定した生活を投げ打つて発展途上の奥地で診療に当たつたのだろうか。「巡回診療の帰途、イラワジ川にかかる大きな落日を見た時、ここは自分の第二のふるさとだと実感したんです。故郷のために働くのは当然のことだと思つていました」

誰に頼まれたわけでもない、自分の役割を認識した人の活動は尊い。長い目で見れば、何にもまして日本とミャンマーの友好と親善に貢献することになるだろう。

■特別非営利活動法人 ミャンマー・ファミリー・クリニックと菜園の会
〒116-0012
東京都荒川区東尾久8-41-23
TEL&FAX
03-6807-7499
ホームページ
<http://mfcg.or.jp>
Face Book:
<https://www.facebook.com/mfcg.or.jp/>
Email:
myanmarfcg.info@gmail.com